

神の計画はこうして成し遂げられた34

「神さまが心を動かされるとき」

ホセア書11章8～9節

導入

ホセア書を読んでいて、新鮮に響いてくることは、神さまが心を動かされるということですね。今朝の聖書は、その箇所になります。朗読します。「：8ああ、エフライムよ。どうしてわたしはあなたを見放すことができますか？ああ、イスラエルよ、どうしてわたしはあなたを引き渡すことができますか？アダムのように見放すことができますか？ツェボイムのように見捨てることができますか？わたしの心は動かされました。わたしの憐れみはかきたてられました。：9わたしは怒りを燃やしてエフライムを滅ぼし尽くすために臨むことはしません。なぜならわたしは神であって、人ではなく、あなたがたのうちに存在する聖なる者で、怒りをもたらすことはしません。」となります。

神さまが心を動かされる。ということは、何を物語っているのでしょうか？それは、ホセアが愛について画期的な真理を体得したことが証したのもありました。

本論1

あなたを見捨てることができようか。と言われているということは、その前提になっているのは、「あなた」と呼ばれている存在が見捨てられるような事をしたということですね。ですから、見捨てる、というのが自然なことになります。

人間が自然に持っている愛は、自分を愛してくれる人を愛するという愛ですね。わたしたちの愛が保たれるのは、残念ながら、自分と相手との関係がいいということが前提なんですよ。

相手が自分を裏切った場合、見捨てるというのが、自然なことですね。相手が自分を裏切った場合、それまで「愛」だと思っていたものが、「怒り」へと変わるのを見ることになります。これが自然の成り行きですね。

怒りは、裏切られた愛の反応だと。そこに救いがないとわかっている、怒りに解決がないことがわかっている、わたしたちが知っているのは、見捨てるしかない。んですね。

本論2

わたしのあわれみはかきたてられました。と神さまがおっしゃっている愛は、聖書でここ以外に2か所あって、いずれもが、非常に心動かされた場面でした。創世記の43章30節は、ヨセフが自分を売り渡した兄弟たちとエジプトで再会した際に、感極まった場面で、もうひとつは、列王記上3章26節で、ソロモン王がこの赤子の本当の母親はどちら

かを見極めようとして、この子をふたつに分けてそれぞれに与えよ。と命じた際に、どうぞ、この赤子の命のままにこの人に渡してください、と本当の母親が感極まった場面です。本当の母親が自分の子どもが生きてほしい。生き抜いてほしい。と思うように、自分を売り渡した兄弟とはいえ、その再会に心動かされるように、神さまは、心動かされた。神さまの憐れみが、かきたてられた。と今朝の聖書は証言しているのですね。

預言者ホセアは、自分を裏切った妻を受け入れることを、神さまに導かれた経験の持ち主でした。神さまがそのことをホセアに導かれた際に、その理由をも添えられました。それは、神さまが、イスラエルの民と契約を結ばれて以降、ご自身のほかに神はいない、と再三そのことを言い続けられたにもかかわらず、他の神々を追いかけ続けた、背き続けたイスラエルの民を、なおも赦して愛し抜こうとされたからでした。ホセアは、その証人として選ばれたのでしたね。わたしたち、人間の自然な愛とは異なる愛が示されることになりました。

裏切った者を愛し抜く！という自然の法則を裏切る愛が存在するのは、この神さまの憐れみゆえですね。わたしたちは、この愛によって、この慈しみによって、救われるのですよね。

本論3

神さまが心を動かされる時というのは、その人を救おうとされたときですね。愛すべき相手のみを愛して、怒るべき相手には怒るのみのわたしたち、人間とは違うのですね。

「われらに罪を犯す者を、われらが赦すごとく、われらの罪をも赦したまえ。」とわたしたちは祈るよう導かれますが、これは、心を動かされる神さまが登場してくださらなければ、現実のものとはならない祈りですね。

ホセアが体験したものとは、これでした。心を動かされる神さまが導かれたことで、どうしても赦せないはずの罪を赦したとき始めて、どうしても赦してもらえないはずの自分の罪を、神さまから赦していただいた恵みの大きさを知ることになったのでした。

結び

神さまは、創造のはじめに、人にふさわしい助け手をデザインされました。今朝注目させていただいているホセア書の文脈で言うと、この「ふさわしい助け手」というのは、愛とはどういうものを証してくれる存在ということになるのでしょうか。

どうしても赦せない人の罪を赦すよう導かれてはじめて、わたしたちは、自分の罪を赦された恵の大きさを知りたのかもしれないね。和解の人生とは、その先の憩いに導かれるとは、今朝注目させていただいている、心を動かされる神さまに触れることをいうのですね。

赤ちゃんが生まれたということは、その瞬間、泣いたということですね。泣かないと困るんですよね。生まれて最初にすることが、泣くということですね。

人生の最後も、きっと泣くということでしょうか。そのどちらもが、うれしい、感謝の涙でありたいものですね。

人生最初の泣くは、本人からしたら、温かい守られていた母の胎から放り出されたみたいなことなので、不安から来るものなのでしょうけれども、泣いてくれて、見守る人たちにとっては、それが正解で、良かった！となるんですから、うれしい感謝の涙ということになりますね。

人生最後の泣くは、本人からしたら、ありがとう！の涙で、周りの人たちにとっても、ありがとう！の涙だったら、うれしいですね。

そのことは、神さまが心を動かされて始めて現実のものとなるのではないのでしょうか。